

20071

エキシマレーザー施行例に対し OCT を用いたプラーク性状の評価

【背景】エキシマレーザー冠動脈形成術（ELCA）は冠動脈狭窄の原因となるプラークそのものを蒸散する治療である。そのため、繰返すステント内再狭窄等の治療で当院でも施行し有効な治療手段となっている。しかしながら、施行例すべてにおいて期待した効果が得られるわけではない。そこでELCA 施行症例のプラーク性状の評価を行った。

【方法】ELCA 施行時、イメージングデバイスとして OCT を用いた症例を対象とした。その中で良好なデバルキングが行えた症例、デバルキングが不十分だった症例のプラーク性状をそれぞれ評価する。

【結果】良好なデバルキングが行えている症例のプラークはそのほとんどが血栓等の柔らかい性状のものであった。デバルキングが不十分な症例では石灰化等の硬いプラークを認めた。しかし、その原因はプラークの硬さという点だけではなく、レーザーカテーテルの通過性やレーザーの照射条件といったプラーク性状以外の要因も大きく影響すると考えられた。

【考察】当院での ELCA は血栓等の柔らかいプラークに対して良好な成績を収めている。それらのプラークが比較的多い ACS に対しての使用は治療の幅を広げるものと考えられる。また、デバルキングが不十分であった症例からも、イメージングからの情報・エキシマレーザー装置の設定次第では、より良い効果を得られる可能性があると考えられる。そのため、それら装置の操作を行う我々コメディカルはエキシマレーザー装置の運用・イメージングからの情報収集能力等に更に熟練すべきである。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号